論文

「妖怪」との出会いからみる「学校の怪談」の現代的意味

The Contemporary Significance of "School Ghost Stories" as Observed from Children's Encounters with "Yōkai Spirits"

吉岡　一志
Kazushi Yoshioka

Abstract:
By analyzing the different ways in which children encounter "yōkai spirits", the purpose of this study is to clarify the relationship between "yōkai spirits" and children, and also to consider the significance to children of "school ghost stories". Previous research into folklore has explained contemporary "school ghost stories" as residual "folk sensations" handed down from pre-modern times. This study attempts to reveal the contemporary significance of "school ghost stories", and the results of the survey show clearly that modern children categorize "school ghost stories" as an aspect of play.

キーワード：学校の怪談，非日常性，子ども，遊び
Key words：School Ghost Stories, Extraordinariness, Children, Play

１．問題設定

本稿は、子どもたちが語る「学校の怪談」を対象として、子どもたちと「妖怪」との出会い方の分析を通して「妖怪」と子どもたちの関係性を明らかにし、現代の子どもにとっての「学校の怪談」の意味を考察することを目的とする。

「妖怪」をアカデミズムの俎上に上げ、そこから人々の信仰のありようを解明しようとした先駆者の一人として、柳田国男の功績は非常に大きい。柳田（1989）は、「妖怪」に焦点をあてるにあたって、「幽霊」との概念上の区別を行っており、その際「妖怪」の特性として出現場所が特定されていることを指摘した。その他にも、「妖怪」は特定の相手を選ばないこと、宵や暁などの薄明かりの時間帯に出現することをあげる。

柳田の説は、多くの批判を浴びながらも長期にわたって参照され続け、現在でもその影響力は脈打っている。例えば、宮田（1985）は「妖怪」の出現場所として人の往来の多い「辻」をあげ、「あの世」と「この世」の境界と見なしている。さらに小松（1994）は山口（1975）の人類学の知見を参照しながら、組織化された空間の中心から隔たった場所に「妖怪」の出現しやすい特性を見ている。両者とも、「妖怪」が特定の場所に出現するという柳田の説明に従いながら、その場所の境界性に注目していると考えることができよう。

では、現代の子どもたちが学校の中で語っているとされる「学校の怪談」でも同様の指摘ができるのだろうか。「学校の怪談」研究の第一人者として知られる常光（1993）は、現代の子どもたちの間に「民俗的感覚」が残っているとして、トイレや特別教室での「妖怪」の出現が特に際立つという指摘を行っている。このことから、これらの場所がなぜ怪異の発生に結びつくのかが考察されている。

常光（1993）によれば、トイレは、特に個室の場合、完全には仕切られていない孤立した空間であり、下半身を露出した状態でかがむという行為を必然的に伴うために生理的・心理的な不安が絶えず付きまとうのみならず、その不浄さなどから学校の規律や秩序から逸脱した場であるという。また、特別教室

は、子どもたちがそのほとんどの活動の時間を過ごす普通教室とは違い、利用時間が制限され、さらに特殊な教材がある非日常的な空間と見なされる。すなわち、ここでも、中心、日常から隔てられた境界が重視されているのである。さらに言えば、トイレに関しては宮田（1979）を引用していることからも、「民俗的感覚」を通して、現代の「学校の怪談」を捉えようとしていることがわかる。

このように、常光（1993）が前提としている枠組みは、現代の「学校の怪談」を前近代的な空間に対する心性を継承する現代人によって語られているものと見なしていることである。現代の事柄を民俗的心性の残滓として説明しようとする民俗学のアプローチを完全に否定しようとする意図はないが、前近代から近代へと社会の形態が大きく変化していくなかで、たとえそれが断絶したものであろうとも、一種の連続性を持ったものであろうとも、民俗学においては人々の心性を変化するものとして捉える視角が欠けていることは否めない。

そこで、本研究では、現代の子どもたちが語る「学校の怪談」を対象として、どこに「妖怪」が出現するのかを改めて検討し、「妖怪」の現代的様相を明らかにすることを目的とする。また、同時に、子どもが語る「学校の怪談」に焦点をあてることで、「妖怪」の現代的様相として、子どもと「妖怪」との関係性を探っていく。

2．調査資料

本調査で使用するサンプルは、1995年、講談社発行の『みんなの学校の怪談 赤本』である。同書は、小学生を中心とする一般読者から投稿された「学校の怪談」集である。その投稿数は12,000通に及び、計556話が収録されている[1)]。そのうち、複数の語りがひとそろいとなって新たな語りを生み出す「学校の七不思議」、16歳以上による投稿、学校以外が舞台となっている語りを除外した結果、541件を分析可能なデータとして採用することとする。サンプルの構成は表1の通りである。性別、年齢の合計が541件に満たないのは、不明なもの、複数名による投稿を除外したことによるものである。

なお、当時の編集担当者に確認したところ、同書の構成は、各投稿をテーマごとにグルーピングし、カテゴリー別に配列したとのことである。その際、掲載されているカテゴリーごとの話数は投稿されたものの割合と概ね合致するという。つまり、或る程度編集者による手が加わっているものの、同書におさめられたサンプルは、収集時に子どもたちによって語られた「学校の怪談」の総数の縮図と考えることが可能である[2)]。

表１　投稿者の属性

		度数	有効パーセント
性別	女子	359	67.2
	男子	175	32.8
	合計	534	100
年齢	6才	4	0.7
	7才	13	2.4
	8才	47	8.8
	9才	102	19.1
	10才	117	21.9
	11才	125	23.4
	12才	85	15.9
	13才	25	4.7
	14才	13	2.4
	15才	4	0.7
	合計	535	100

3．分析

（1）「妖怪」の出現場所

それでは、はじめに「妖怪」がどこに現れるのかを確認するため、全語りの中から「妖怪」の出現場所を集計したものを表2に示した。図1は表2をグラフ化したものである。常光（1993）は、「妖怪」がトイレや特別教室に多いと指摘しているが、これは印象の範囲を出ず、客観的に示されたものではない。

集計に際しては、『みんなの学校の怪談 赤本』で提示されているカテゴリーを採用しなかった。その理由は、同書のカテゴリーは音楽室などの場所の他、「妖怪」の特徴など、異なる基準で分類されているためである。そこで本調査では、「妖怪」の出現場所のみを基準として集計を行った。

特に説明が必要なカテゴリーは「移動」「その他」「不明」である。追いかけてくるなど移動することが明記されたものや複数か所に出現するものがあり、これらは「移動」と言うカテゴリーに分類している。ただし、32話のようにベートーベンがトイレの鏡に映るという語りがあるが、移動したことが明記されていなければ遭遇した場所を優先した。また、出現場所が記載されていない場合もある。149話のように「給食を食べおわって、ふとおぼんを見ました」とある場合、文脈から教室であると判断できる。このように、場所が明記されていないもので

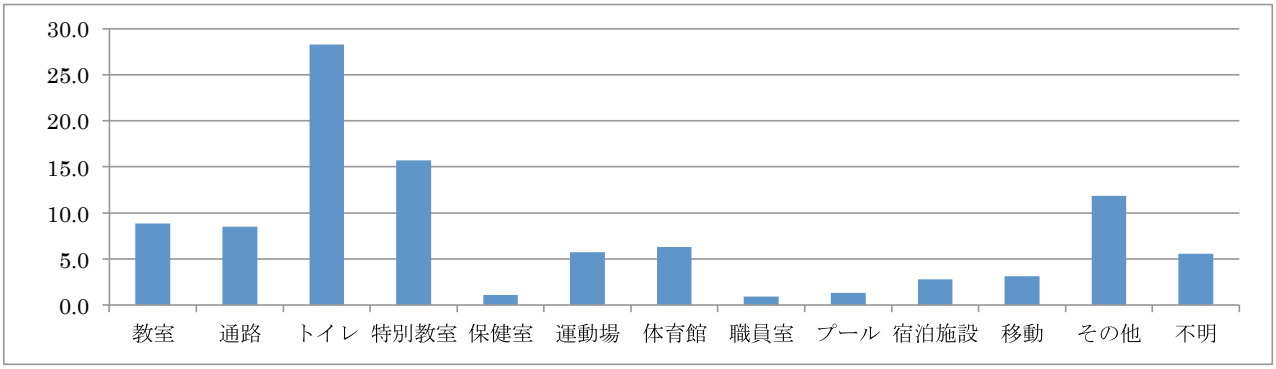
も推測できる範囲で特定した。また、「銅像があるところ」などのように明確さを欠くものの語り手たちには場所が特定できると考えられるもの、さらに少数かつ分析に重要な意味を持たないと考えられるものはすべて「その他」に分類した。場所が明記されておらず、推測も不可能なものは「不明」に分類した。

表２　妖怪の出現場所

教室	通路	トイレ	特別教室	保健室	運動場	体育館
8.9(48)	8.5(46)	28.3(153)	15.7(85)	1.1(6)	5.7(31)	6.3(34)
職員室	プール	宿泊施設	移動	その他	不明	合計
0.9(5)	1.3(7)	2.8(15)	3.1(17)	11.8(64)	5.5(30)	100.0(541)

数値は%、カッコ内は実数。

図１　妖怪の出現場所



まず目をひくのはトイレの多さである。他の場所と比べ圧倒的にその割合が高く、実数にして153件であり、全体の28.3%である。次いで、大きくその数が下回るが、特別教室が15.7%である。以下、その他が11.8%、教室が8.9%、通路が8.5%、体育館が6.3%、運動場が5.7%と続く。

表2を見る限り、常光（1993）が指摘する通り、トイレと特別教室の割合が他の場所と比べて高いことがわかる。しかしながら、特別教室というカテゴリーには注意が必要である。集計の際に、特別教室としたものの中には、音楽室、理科室、図書室、図工室、家庭科室、クラブ室、多目的教室、視聴覚室が含まれている[3)]。これらの特別教室の値を個別に見ていくと、音楽室は7.2%、理科室は3.3%、図工室は1.8%、図書室は1.7%、家庭科室は1.1%、クラブ室、多目的教室、視聴覚室についてはそれぞれ実数にして1件のみ、いずれも0.2%であった。

特別教室の中でも最も値の高い音楽室であっても、教室の8.9%に及ばない。常光（1993）が特別教室の対比として取り上げたように、普通教室は子どもたちの活動の中心的な場であり、非日常性とは対照的な空間であるはずである。しかし、データに基づいて考えるならば、特別教室を非日常空間、普通教室を日常空間として、前者を「妖怪」の出現する境界と断定してしまうことは慎まなければならない。

このように見てみると「妖怪」の出現場所は、子どもたちにとって日常的な活動場所と言えるのではないだろうか。「妖怪」の出現場所を非日常空間と捉えるならば、保健室、職員室、あるいは修学旅行などを含む宿泊施設なども、「妖怪」の出現場所としてもっと語りの中に現れてもおかしくない。一方で、教室を舞台とする語りの多さから考えると、普段子どもたちが使用しない非日常性の高い場所に「妖怪」が出現するという説明は成立しない。むしろ、子どもたちは、トイレも含め、普段から日常的に身を置く場所で「妖怪」と遭遇しているのである。そう考えるならば、宮田（1985）が辻を人々の往来が多い場所と指摘することも、無視することはできない。日常的に人々が多く集まるところに「妖怪」はその姿を現すのかもしれない。

またもう一点、ここで注目すべきは「不明」の少なさである。「不明」として分類したものは、「妖怪」と出会ったこと、あるいは存在するということのみが語られたものであり、どこで出会ったのかが判別できないものである。「不明」は全体の5.5%であり、実数にすると30件しかない。言い換えれば、

「不明」以外の語りには、「妖怪」の出現場所、遭遇場所が示されているということである。つまり、「妖怪」たちは特定の場所に縛り付けられているとみることもできよう。この点は柳田（1989）の指摘と合致する。子どもたちにとって「妖怪」の出現場所が曖昧なままにされることには不都合があるだろうことが推測できる。子ども自身がどこにいようとも、不測の事態として「妖怪」との出会いがあるわけではないのである。

以上のことから、常光（1993）が指摘するように、必ずしも空間の非日常性を「妖怪」の出現場所として理解することはできないだろう。ただし、トイレが圧倒的に妖怪の出現場所として選ばれているという特徴は、先行研究とも重なる部分である。では、非日常的な場という理解以外に、この事態をどのように説明することができるのだろうか。本研究では、以下で、トイレに限定し、いかにして子どもたちがトイレで妖怪に出会っているかを検討する。

（2）トイレにおける「妖怪」との出会い方

ここでは、子どもたちがトイレでどのように「妖怪」に遭遇しているかを検討する。それは、トイレを非日常的な空間として自明視するのではなく、「妖怪」との遭遇の仕方を見ていくことで、トイレという空間の意味を子どもたちの行為から浮かびあがらせることができると考えられるためである。トイレにおいて「妖怪」との遭遇の仕方を詳細に見てみると、かなり厳密に出現場所が決まっていることがわかる。

【301話：9歳・男子】

二階の男子トイレのいちばんおくは、トイレットペーパーをいれてもいれてもなくなってしまう。ある男の子が、ある日そのトイレに入った。さて出ようとしたが、トイレットペーパーがない。すると上から「青い紙はいりませんかァー」という声がした。男の子は「いります。」とこたえた。そのとたん、何かが男の子に飛びついてきて、男の子の血をすいとってしまった。

上の引用の例では、子どもたちは校舎の「二階の男子トイレ」、中でも「いちばんおく」にある個室で「妖怪」に遭遇している。このことから、すべてのトイレではなく、特定の階、男女の別、個室の場所など、出現場所が細かく限定されていることがわかる。さらには、「新館のトイレ」（404話：11歳・女子）や「北校舎の男子トイレ」（432話：8歳・男子）などの異なる校舎や、「体育館の裏の便所」（510話：11歳・男子）や「プールのトイレ」（436話：9歳・女子）など校舎以外の各種施設のトイレなど、「妖怪」と遭遇するトイレはかなり限られていることがわかる。

このようにトイレであってもすべてのトイレではなく、かなり制限された場所でのみ、子どもたちは「妖怪」に遭遇することがほとんどである。153件のトイレを舞台とした語りの中で、場所が限定されているのは106件に及び、その割合は69.3%である。トイレに限らず、教室では「3年2組で」（501話：8歳・女子）、通路では「二階から三階にある階段の四段目に」（275話：11歳・女子）というように、「妖怪」の出現場所は細かく限定されているのである。つまり、どこでも「妖怪」に遭遇するのではなく、特定の場所を避ければ「妖怪」と遭遇する可能性は極めて低くなると考えられる。

さらに「妖怪」との遭遇を制限するのは空間に留まらない。例えば、時間も「妖怪」との遭遇を制限している。時間による制限は例えば次のようなものがある。

【487話：10歳・男子】

４月４日４時４４分にトイレに立っていると洗面所から水がながれる。それを見ると四次元ババアに四次元の世界につれていかれ、もうこの世界にもどれない。

「四次元ババア」は子どもたちにしばしば語られる「学校の怪談」に特有の「妖怪」である。出現場所がトイレとは限らないが「4時」と深いかかわりがあるようで、「四時ババ」とも呼ばれることもあるという（学校の怪談編集委員会 1996）。他にも「六月六日の六時六分六秒」に便器の中から現れる「六時ジジイ」（445話：9歳・男子）なども語られる。日時が指定されることで、これらの「妖怪」に出会うことができるのは、年に一度のほんの一瞬の間に制限される。上述の487話の例では、「四次元の世界につれていかれ」てしまうというが、虚実はどうあれ、被害にあう可能性はほとんどないと言えよう。

その他、「夜」（278話：9歳・男子）、「放課後」（295話：12歳・女子）、「三時ごろ」（378話：9歳・女子）など、時間があいまいなものを含めると、一定程度時間による「妖怪」のコントロールが見られる。中には「それは雨がふっている午後のことでした」（386話：10歳・女子）というように、「妖怪」の出現時間を積極的に限定しようとする意図が不明瞭なものもあるが、場合によっては、こうした語りが伝承されるにつれて、徐々に時間が具体的なものに変化していく可能性は十分にあるだろう。そこで、上記のような時間制限のあいまいなものも含め、集計してみると42件抽出された。子どもたちは、トイレの場所を限定するだけでなく、時間にも制限を設け、「妖怪」との棲み分けを行っているように見える。

さらに興味深いのは、「妖怪」の召喚儀式とでも呼ぶべき行為が多数みられることである。子どもたちは特定のトイレで特定の時間に「妖怪」の出現を予測し、回避するだけではない。むしろ積極的に「妖怪」を呼び出そうとしているかのように儀式を行っているのである。

【32話：11歳・女子】

わたしが体験した話です。三年生のときでした。Ｙ小学校のトイレの鏡にベートーベンがうつるというのです。トイレの鏡に×の印をかいて、「ベートーベン」と三回となえながら三回まわるのです。わたしは、Ｓ子とＭ子とためしてみました。が、なにもおこりません。ホッとしたその瞬間です。とつぜん、『運命』の曲がながれだしたのです。

【291話：10歳・女子】

三人でトイレにいって、三人でトイレの鏡を見る。まんなかにいる人は、鏡にうつっていない。

【397話：11歳・男子】

どこかの学校のトイレに太郎さんが出るときいたことがある。鏡に○△□と三回かいて、石を三つトイレになげて、「太郎さーん。」というと、「はーい。」と返事がかえってくる。

以上、特徴的な儀式を3つ引用した。いずれの事例も、どこのトイレかはっきりせず、また、時間の記述も見当たらないという点で共通する事例である。しかし、どれも複雑な儀式が行われていることがわかるだろう。32話では、鏡に×印を書き、「ベートーベン」という呪文を3回唱えながら、3度回る必要がある。397話でも同様に鏡に記号を書き、投げるための石を3つ用意しなければならない。291話では3人が連れ立ってトイレに行き、鏡を注視する必要がある。

言うまでもないことだが、こうした儀式の作法は、通常のふるまいの中で偶発的に「妖怪」を呼び出してしまうことが起こり得るような類のものではない。すなわち、子どもたちは「妖怪」と遭遇するために、手の込んだ儀式を意図的に行わなければならないのである。子どもたちが「妖怪」に突発的に出会うことはいよいよ困難なことなのである。

もちろん、この儀式の中には非常に簡便なものもある。トイレに入る際に「ねえ、だれか指ずもうしない」と声をかけると壁を突き破って手が出てくるというもの（269話：12歳・女子）、トイレの個室を4回ノックすると誰もいないはずなのにノックが返ってくるというもの（388話：11歳・女子）、「やみ子さーん」と名前を呼ぶと人魂が飛ぶ（409話：9歳・男子）など、ほとんど労力を要しない儀式も少なくない。しかし、100回「花子さん」と呼びかける（408話：7歳・男子）、123回のノックを要するもの（502話：9歳・男子）、「おしっこを10秒以内にする」もの（507話：10歳・男子）など、単純だが労力のかかるもの、一定の技術を伴うものなどがある。いずれにしても、そこには「妖怪」に出会おうとする子どもたちの明確な意志をうかがい知ることができるのではないだろうか。なお、何らかの儀式が行われている語りは81件であり、全体の52.9%であった。

このように見ていくと、子どもたちは「妖怪」との遭遇に様々な条件付けをしていることがわかるだろう。これまで空間、時間、儀式の三つの局面から「妖怪」と出会う条件を見てきた。これらの条件は単独に存在するのではなく、様々に組み合わされている。例えば、以下の引用を見てみよう。

【369話：11歳・女子】

午後五時、友だちがひとりで、二階の女子トイレのおくから二番めのトイレを五十回たたき、「はーなこさん、あそびましょ。」と電気を消してやったら、「はァーい。」という声がかえってきた。こわ

くなって「ごめん、きょうはあそべないの、忘れてた。」というと、花子さんは「べつにいいよ。またこんどね。」といったそうです。

引用を見ると、まずは「午後五時」という時間が設定され、「二階の女子トイレの奥から二番目」というように空間が限定される。さらに、「トイレを五十回たたき、『はなこさーん、あそびましょ。』と電気を消」すという呪文を伴う儀式を行うことで、ようやく「妖怪」の声を聞くことができる。さらに注目すべきは、「ごめん、きょうはあそべないの、忘れてた」ということで、「花子さん」を回避する術も付け加えられている。複雑に組み合わされた条件のもとでようやく「妖怪」を召喚したにもかかわらず、その「妖怪」を容易に回避することもできるのである。

もっとも、回避手段が語られているものはそれほど多くない。トイレで「青い手」を見たら「ごめんなさい」と一回言わなければ呪われる（311話：9歳・女子）、花子さんに出会っても「百点のプリント」を見せると逃げる（348話：9歳・男子）、トイレにいる「三十センチくらいのおばあさん」が出すクイズに「五問のうち三問以上こたえないと、一生つきまとわれる」（450話：12歳・女子）など、上記の369話も合わせて11件である。件数は少ないものの、その意義は非常に大きい。

【299話：9歳・男子】

トイレに入って、出ようとしたらカギがかかって出られなかった。そうしたらいきなり上からひくい声で「赤と黄色と白と青、どれがいいー。」という声がきこえた。「赤。」といったら、血まみれになって殺されてしまう。「黄。」といったら、体をばらばらにされる。「青。」といったら、首をしめられる。「白。」といったら、なにもおこらない。

以上の引用のように時間も、場所も制限されておらず、また意図的に呼び出したわけではない「妖怪」であっても、最終的には無事に回避できるようになっているのである。この意味で、回避術も「妖怪」との出会いを子どもたちがコントロールする一つの手段と見てよいだろう。

そこで最終的に、時間、場所、儀式、回避術のいずれかが含まれているものを集計したところ136件であり、全体の88.9%であった。すなわち、子どもたちのほとんどは偶発的に、理不尽に「妖怪」に遭遇するようなことはなく、出会ったとしても生命の危機に陥る前に回避することができるのである。

このように、子どもたちは、基本的には「妖怪」と出会わないような仕組みを作っておきながら、出会いたいと思えば出会えるように、またいざとなれば回避手段を用意し、その出会いをコントロールしているということができよう。

４．結果と考察

以上、現代の「学校の怪談」をもとに、「妖怪」の出現場所を確認し、子どもたちがどのように「妖怪」と遭遇しているのかを検討してきた。本調査より得られた結果は以下の通りである。

第一に、先行研究と同様にトイレが最も「妖怪」の出現率の多い場所であることが確認できたが、一方で、特別教室については個別の教室で見ると必ずしも出現率は多くなく、子どもたちが日常的に多く行きかう場所に「妖怪」が出現していることが明らかになった。

第二に、ほとんどの「妖怪」は出現場所が特定されており、また、遭遇時間も制限されることで、子どもたちは偶発的に「妖怪」と遭遇するのではなく、特定の場所を避けることで「妖怪」との出会いを回避することができることが明らかになった。

第三に、儀式、回避術などによって、「妖怪」を避けるだけでなく、積極的に出会おうとする子どもたちの意志が確認された。

これらの結果から「妖怪」の現代的様相を、子どもと「妖怪」の関係性から考察しよう。常光（1993）は、トイレや特別教室を非日常的な空間と位置づけ、そこに伝統的な社会と類似した境界性を見出した。しかしながら、本稿におけるトイレでの「妖怪」の遭遇の仕方から見た場合、トイレの境界性といった伝統的な心性の残滓は確認できなかった。なぜならば、すべてのトイレではなく、特定のトイレのみが「妖怪」の出現場所になるからである。

もちろん、伝統的社会であってもすべてのトイレに「妖怪」が出現するわけではなかったのだろう。しかし、本調査の結果から見る限り、トイレの境界性といったシンボリックな側面よりも、トイレの建築上の特質による「妖怪」のコントロールのしやすさの方が現代の子どもたちにとって重要な意味があ

るようにみえる。トイレが非日常的な空間だからではなく、子どもたちが自らの意志でトイレに意味を付与することによって非日常空間に変容させることができるがゆえに、そこに「妖怪」が多く出現することになったのではないだろうか。子どもたちは「民俗的感覚」とは異なる態度で「妖怪」たちとかかわっていると考えられるのである。

例えば、トイレや教室は日常的に利用頻度の高い空間であるとともに、学校のなかでも複数存在している場所である。さらにトイレの個室ともなると、その数はさらに多くなる。そのために、301話のように「二階の男子トイレのいちばんおく」といった空間の制限がしやすいのではないだろうか。すべてのトイレに無作為に「妖怪」が出現するとなれば、子どもたちは常時その恐怖に怯えながら生活せざるを得ない。しかし、複数ある空間の内、特定の場所だけに「妖怪」が出現するのであれば、回避も容易になろう。子どもたちにとって日常的な空間であり、かつ、回避可能な場に「妖怪」は出現させられているのである。

このことは、子どもたちが「妖怪」との出会いの可能性を排除していないことを示している。実際に、子どもたちは「妖怪」を回避するだけでなく、積極的に「妖怪」に出会おうとしている側面もある。柳田（1989）が指摘するような伝統的な「妖怪」は避けることが目指されていたのに対し、会おうと思えば会えることが目指されているということが現代の子どもたちが語る「学校の怪談」の特徴であろう。「口裂け女」の語りを分析した野村（2005）も子どもたちが「妖怪」を意図的に呼び出そうとしている点を指摘している。子どもたちは「妖怪」に対し主導権を握り、コントロールし始めたのである。

では、なぜ子どもたちは「妖怪」を呼び出す必要があるのだろうか。建築史の立場から化物屋敷を読み解いた橋爪（1994）によれば、恐怖は、安全を確保されることで娯楽へと反転するという。しかし、地上を低速で進むジェットコースターに魅力がないように、完全な安全が担保されてはならない。ある程度不完全な安全が娯楽には不可欠なのである。楽しみの本質を社会学的に分析したチクセントミハイ（2000）は、遊戯活動の中には危険に身をさらすことによって人々がその活動に没頭することを促進させるものがあるという。その意味では、出会わないでいられながら、出会うこともでき、また出会っても回避できる余地を残している「学校の怪談」は、子どもたちにとって身の危険から生じる恐怖を適度に調整することを通して、遊びとして位置づけられていると考えられよう。

橋爪（1994）が分析したように、化物屋敷を娯楽として楽しむ大人と同様に、子どもたちも恐怖を楽しんでいるのだろう。ただし、「学校の怪談」を遊びと考える視点は、それほど新しいものではない。山田（2005）は「学校の怪談」に「社交」の側面があるとして、そこに「遊戯」としての性質を見ている。しかしながら、本調査によって見出された「妖怪」をコントロールする子どもの姿を、同時代の大人たちの間で語られる怪談と対比してみたらどう見えるだろうか。

『新耳袋－あなたの隣の怖い話』（木原浩勝・中山一朗著、扶桑社，1990年）など現代の大人向け怪談を見ると、人々は不条理に「妖怪」に遭遇する場合がほとんどである。つまり、子どもたちは儀式を多様に発展させ「妖怪」をコントロールする一方で、大人たちは制御不能な「妖怪」を楽しんでいるように見える。

大人が「妖怪」を完全に制御不能なものとして理解しているのならば、それは娯楽として楽しめないものになってしまう。そのため、大人は子どもとは違う方法で、一見制御不能に見える「妖怪」を制御する方法を持っているのだと考えられる。こうした「妖怪」の制御の方法の違いに、現代の子どもと大人の差異を認めることができるだろう。

しかし、この「妖怪」のコントロールの仕方の違いをもとに、大人と子どもを分かつ本質的な差異と見なしてしまうことは性急であろう。というのは、エリアス（1977）が示したように、子どもと大人を分割する視点は、人々の関係の網合わせの力学が変動する過程で生じるものと考えられるからである。だとすれば、現代の子どもと大人はどのような社会的な網合わせの中に置かれ、個々の欲求がどのように抑制されたり、あるいは解放されたりするのかという視点の中で吟味していく必要があろう。子どもと大人が「妖怪」をめぐってどのような関係を取り持ってきたのかその変化に焦点をあてながら、こうした子どもと大人の差異を見極めていくことは今後の課題である。

注

1）本調査で用いるサンプルは、『学校の怪談』シリーズ（講談社）の第1巻から7巻の期間に読者から寄せられたものである。同書には、はがきが挟まれており、「あなたの知っている怪談」という文言で「学校の怪談」に限らずに広く読者から収集されている。なお、投稿されたもののうち、舞台が学校でないもの、計455話が『みんなの学校の怪談 緑本』に収録されている。

2）『みんなの学校の怪談 赤本』に含まれるデータの詳細については、吉岡（2013）を参照のこと。

3）義務教育諸学校等の施設費の国庫負担等に関する法律施行令第3条第1項には、例えば小学校では「理科教室、生活教室、音楽教室、図画工作教室、家庭教室、視聴覚教室、コンピュータ教室、図書室、特別活動室、教育相談室」が特別教室として定義されている。本稿では、この定義に従って分類を行っている。

引用・参考文献

チクセントミハイ・M，2000『楽しみの社会学』新思索社。

エリアス・N，1977『文明化の過程（上）』法政大学出版局。

学校の怪談編集委員会，1996『学校の怪談大辞典』ポプラ社。

橋爪紳也，1994『化物屋敷－遊戯化される恐怖』中央公論社。

小松和彦，1994『妖怪学新考－妖怪からみる日本人の心』小学館。

宮田登，1979『神の民俗誌』岩波書店。

宮田登，1985『妖怪の民俗学－日本の見えない空間』岩波書店。

野村純一，2005『江戸東京の噂話－「こんな晩」から「口裂け女」まで』大修館書店。

常光徹，1993『学校の怪談－口承文芸の研究Ⅰ』ミネルヴァ書房。

山田厳子，2005「『社交』と『ふるまい』－学校という舞台」一柳廣孝『「学校の怪談」はささやく』青弓社，pp.135-165。

山口昌男，1975『文化と両義性』岩波書店。

柳田国男，1989「妖怪談義」『柳田國男全集6』，筑摩書房，pp.7-212。

吉岡一志，2013「子どもが語る『学校の怪談』の内容分析－子どもは学校制度による「抑圧」に抵抗しているのか」『子ども社会研究』（19），ハーベスト社，pp.63-75。